



『THE JAPAN PUNCH』 1865年12月号 神奈川大学図書館蔵

目次

- 新図書館長からのメッセージ
 - 図書館長 中野 宏一 2頁
 - 平塚図書館長 中山 堯 3頁
- 【連載】W・M・ヴォーリズと『湖畔の声』①
 - 中村 裕史 4頁
- 図書館の所蔵資料紹介
 - 《複製版》の楽しみ 5頁
- 「3 世代の図書館」
 - (シリーズ・神奈川大学図書館の歴史を語る！最終回)
 - 原田 広 6~7頁
- 図書館からのお知らせ 8頁
- 今号の表紙 8頁
- 編集後記 8頁

図書館のコトバ

その⑤ 書架・配架・返本台

図書館では利用者が欲しい本を探しやすくするために様々な工夫がされています。

書架とは、本が並んでいる本棚のことを指します。

配架（または排架）とは、本を正しい配置場所、請求番号順に並べることです。

一冊の本が並べられるべき場所・位置はきちんと決まっています。請求番号がわかれば目指す本がどこにあるのかすぐにわかりますが、これは本がいつも正しい場所に配架されているからです。

返本台とは、利用し終わった本を置く台のことを指します。

利用し終わった本は、その本が配架されていた書架に戻すのではなく、返本台に戻してください。もし本来の場所とは違った場所に戻されると、正しく配架されていないことになり、その本は探しにくくなります。

勿論、借りていた本については、カウンターへ返却するようお願いいたします！

感動と知識

神奈川大学図書館長 中野 宏一



嫌な時代になった。就職難である。高校や大学を卒業し、いよいよ社会へのスタートという時に、就職先がないということは、試練というより悲しくなる。

社会に振り回されながらも、もがいて生きていくのが人生なのだろうか。

か。振り返ってみれば、私も就職試験で不合格になったり、就職浪人をしたりの経験がある。「人の一生は重荷を負って遠き道を行くが如し、・・・」なのだろうか。

しかし思い返してみれば、人生、悪いことばかりでもなかった。「心踊る喜び」や「深い感動」を味わったこともある。

「心踊る喜び」とは、子供の頃に北海道の山や川で夢中で遊んだ日々であり、また青春時代の恋愛経験でもある。

「深い感動」とは、小学生のときに読んだ『フランダーズの犬』やパール・バック『大地』、中学時代のベルヌ『地底旅行』など、想像もできない未知の世界が展開して、深く感動したことである。高校時代に読んだ武者小路実篤『友情』は小樽桜陽高校の当時の図書室で、いつも人気の上にランクされていた。

しかし残念なことに、心躍る喜びも深い感動も、青春時代が過ぎると共に少なくなる。図書館は、感動の名作が多数収集されている宝庫である。感動は人生を大きくする。若い学生諸君には、この宝庫を開いて深い感動をたくさん得てほしい。

* * *

ところで、冒頭の就職難はどうしたら解決できるのだろうか。

日本企業は近年、工場や小売店を海外、特にアジア諸国で展開している。工場の海外移転はよく知られているが、小売店の海外出店はあまり知られていない。セブン・イレブンの海外店は現在3万7千店あり、ファミリーマートは海外での4万店計画を発表している。外食産業では、吉野家の海外店は中国だけで172店舗あり、モスフードは台湾だけで155店舗ある。

このようなグローバル経営では、企業の利益は確保できても、国内の雇用や法人税収入は確保できない。私見を要約しよう。

アジア諸国における所得水準の上昇は急であり、その観光客を対象とする観光ビジネスは、雇用確保のための有望ビジネスである。農業の法人化による若者の農業就労促進も、その一つである。

しかし最も重要なことは、国内に製造拠点をもちハイテク産業の育成政策である。すなわち、ナノテク、バイオ、次世代光技術、ITなどの活用、ロボット、航空機、次世代自動車の製造などによる雇用の確保である。同時に、外資企業の誘致も必要である。そのためには、米国と並んで世界一高い法人税率を引き下げるなどの環境整備を行うことも必要となる。

これらの具体的な戦略立案には、法律、経済、経営、外国語、人間科学、理学、工学の知識が必要になる。本学の図書館には110万冊を超える蔵書があり、世界の最新情報も入手できる体制を整えている。先人の知識を学び取り、現在の状況に応用する知恵を働かせることにより、冒頭の深刻な問題も解決できる。

図書館は感動と知識の宝庫である。偉大なり、神奈川大学図書館。

私の好きな本・薦める本

中野孝次『ハラスのいた日々』

犬好きな人にとっては、「よくぞ書いてくれた！」と拍手喝采を送りたくなる好著。新田次郎文学賞受賞作。

城山三郎『落日燃ゆ』

戦犯広田弘毅首相が刑場の露と消えるまでを描いた作品で、凜とした人間の生き様に深く感動し、落涙を禁じ得ない。毎日出版文化賞受賞作。

『万葉集』、『古今和歌集』、『新古今和歌集』

学校を卒業後に改めて読んでみると、実にすばらしい歌が多いことに驚く。「大空は 梅ののほかに かすみつつ 雲りも果てぬ 春の夜の月」

(新古今和歌集)

図書館？

神奈川大学平塚図書館長 中山 堯

待ち合わせに使ったりすることがあって、近くの市民図書館にたまに入ることがある。規模は小さいけれども図書館なので本は分類して置いてある。10進分類法か何か知らないが。図書館は書物の保管と閲覧を集約する場（スペースとシステム）として社会に定着し、分類手法を技術的根幹として生き延びてきたということらしい。では利用者の立場からはどうか？大学の図書館は学生と教員の学習と研究の知識源というところだろう。勉強本を探すのだったら内容に即してピンポイントに目的の本にアクセスできると効率がよい。大学の図書館はそうになっている。多分。ところで、国会図書館では蔵書のデジタル化が進行中でいずれすべての本がデジタル情報として閲覧可能になるようだ。デジタルと言っても今のところはイメージデータのようなのだが。とにかく図書館の変貌を如実に示していることはたしかだ。世界中の図書館の本をすべてデジタル化するというプロジェクトはGoogleがだいぶ前に宣言している。一方、学術コミュニティにおける情報のデジタル化と利用はずっと先行している。データベースやソフトウェアの共用やサービス、プレプリントの流通や学会のデジタルライブラリなどはごく普通のことになっている。

我々を取り巻く情報環境がそのように様変わりしつつある中で、神奈川大学の湘南ひらつかキャンパスに図書館ができた。正確には、図書室を拡充して図書館にした…ということだから建物ができた訳ではない。だが問題は名称や建物ではない。機能的に時代錯誤なものにしないことが第一だ。それはデジタルがどうのといった情報メディアのことだけではない。例えば、コンピュータ分野の技術は陳腐化が著しく速い。「IT」が少し前から「ICT」に置きかわりつつあるのは象徴的だ。その手の技術本はタイミングを逃さず新陳代謝させないとナンセンスなことになる。かつ、良書を選択することが肝だ。もっとも、最新のホットな情報はインターネット／ウェブにある。図書館はすっとばされるのだ。本になるのを待ってられないことも、本にならないこともあるから。

ウェブ時代になってから学生と図書館の関係はぜひぶん変わったのではないかと思うが、どれくらいどのように変わっただろうか。うまく使えば、手元



に図書館を置いているようなものなのだが。ウェブ情報を手軽に扱えることは諸刃の剣でもある。剽窃や信頼性や品質の問題だ。こういうエッセイだってタイトルさえ決まればあちこちのブログから同じような記事を持ってきて切り貼りすればすぐにできてしまうだろうし、いくつでもバリエーションができそうだ。情報や知識の表現媒体が印刷物（本）からデジタル情報（ウェブ）に根底のところまで移行しているということだ。ただ、表現型が文字だという点は本と変わらない。情報の伝達系としてみれば、本を読むという行為がディスプレイの文字を読むという行為に置きかわっただけとも言える。そこでKindleやiPadの登場となった。コンテンツがそろえばハードとしての本や閲覧場所としての図書館は不要になる。その代わり、良質なコンテンツを豊富に用意して提供するという形の図書館が必要とされるだろう。そういう状況がしばらく先の話しだとしても、湘南ひらつかキャンパスの図書館が今のウェブ時代にふさわしい知の環境として利用者にとって魅力的な姿に変わることを望みたいものだ。

さて、世の中には良い本と悪い本がある。下の三冊は良い本だと思う。個々にコメントはしないけれど、共通しているのは記述が克明で緻密、明快でノイズが少なく、熱意と抑制が均衡していてとても読ませる本になっているところ…と思っている。

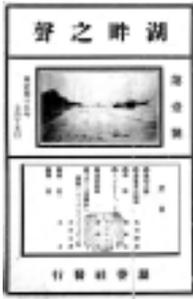
私の好きな本・薦める本

佐藤優『自壊する帝国』（新潮文庫）
岩井克人『会社はこれからどうなるのか』（平凡社ライブラリー）
デイビッド・J・リンデン（夏目大訳）
『つぎはぎだらけの脳と心』（インターシフト）

W・M・ヴォーリズと『湖畔の声』①

—「今日は昨日、明日は今日より、進みに進み行く、我等のよき日とせん」—

中村 裕史（図書館総合サービス課）



湖畔の声 明治45年7月

『湖畔の声』という雑誌

『湖畔の声』という雑誌がある。明治45年（1912）7月に創刊され、太平洋戦争中の2年（昭和19年5月号から昭和21年5月号）を除き、現在も1,100号を超えて発刊され続けている。これだけの長期にわたり刊行を継続している雑誌は国内では数少ない。神奈川県大学の所蔵は製本された状態で24冊。創刊号（1912）から昭和29年（1954）までの期間である。次に形態に目を向けてみよう。昭和9年（1934）まではくすんだ紅緋、それ以降はブルジャンブルーの製本がなされている。経年劣化のために随所に傷みが目立つがしっかりと作りの作りである。背表紙にはタイトルと号数、そして特筆すべきことに24冊の内3冊には“吉田蔵”の刻印が押されている。見返しを開くと“近江八幡町池田町 吉田悦蔵”と蔵書印が押されていることから、もとは吉田氏旧蔵の品であったと推察される。後述するがこの吉田悦蔵こそ、ヴォーリズと常に苦楽を共にし、師弟の関係を越え、兄弟とすらいえる信頼関係で硬く結ばれることになる“近江ミッション”の創立メンバーである。その吉田氏旧蔵資料がどのような経緯で神奈川県大学の所蔵となったのか、その来歴の詳細は調査中である。図書原簿を見ると昭和51年に購入されたことがわかるがそれ以上の情報はない。一つの推測ではあるが以下の事情が関係しているのかもしれない。ヴォーリズは昭和15年（1940）12月、「近江兄弟社図書館」を近江商人の屋敷を利用し設立し、昭和50年（1975）まで私立・近江兄弟社図書館は運営された。しかし近江兄弟社経営不振の折、その図書と備品一切が市に寄贈され、近江八幡市図書館として市に運営をゆだねられた経緯がある^{注1}。本学へ受け入れられた年代とも符合する。しかし確証はない。

さて、試しに『湖畔の声』をWeb-cat（目録所在情報データベース）で検索してみると全国で26機関の所蔵が確認できるが、創刊号からの所蔵は唯一神奈川県大学図書館のみである。この中には発行元である湖声社にも所蔵のない12年分が含まれており、求めに応じてリプリント版を提供した。2005年はヴォーリズ来日100年にあつた。近江八幡のある滋賀県はもとより、各地で関連する催しが行われたようであり、今改めてヴォーリズの業績を見直す機運が高まっている。

『湖畔の声』はヴォーリズと吉田たちの命を懸け

た挑戦の記録である。これからこの雑誌にまつわるエピソードを書いていくのだが、どこまでのことが書けるのやら、心許ない。しかし、ともかくも話を始めよう。

ウィリアム・メレル・ヴォーリズ来日

話は日露戦争真っ只中の明治38年（1905）2月2日から始まる。午後3時頃、近江八幡の地にYMCAに所属し海外宣教活動の理想に燃えるアメリカ人青年が降り立った。その名をウィリアム・メレル・ヴォーリズという。ヴォーリズという名をご存知ない方もいることと思うが、メンソレータム（現メンターム）を日本に広めたのは彼である。また日本における洋風建築の先駆者の一人としても近年評価が高まっている。

ヴォーリズは多才な人であった（また、そうならざるを得ない環境でもあった）。彼は第一に伝道師であり、そして実業家であり、社会事業家であり、建築家であった。これら全てが合わさってヴォーリズであり、どれか一つを抜き出してもこの人物を知ることには出来ないように思える。さて、後年ヴォーリズは日本国籍を取得し、名前も一柳米来留（米国から来て留まったという意味）と改め83歳で昇天するまでこの極東（Far East）の島国に人生を捧げる事になるのだが、近江八幡に到着した時の心境は深い後悔であった。吉田悦蔵著『近江の兄弟』で紹介されている回顧録の文章を引用しよう。「わたしは、とうとう日の出る国に来た。湖畔の商業学校と中学校で教えるためだ。日本語はまだ三日前に横浜に上陸したばかりだから、オハヨーとサヨナラだけしか知らない。来てみればこんないなか。寒いし、淋しいし、孤独だ。近江の国は人口八十万ときいてきたが、アメリカ人は、わたしの外にひとりもない。英語を話す人もいそうでない。日本は日の出る国ではない。日の入る国のような。いっそ、次の列車で横浜へ行って、船に乗って、帰ってしまったほうがよい」。しかし日本への旅費を借金までして工面したヴォーリズ氏には帰る旅費などあるわけもなく、当初の目的である滋賀商業学校（現八幡商業高等学校）の英語教員として着任することになるのであった。

(つづく)



湖畔の声 大正13年7月

注1：図書館の設立。ヴォーリズミュージアム、<http://vories.com/album/08.html>（参照：2010.03.04）

主要参考文献：『湖畔の声』湖声社／吉田悦蔵『近江の兄弟』近江兄弟社、1969／ヴォーリズ『一粒の信仰』春秋社、1930
奥村直彦『ヴォーリズ評伝：日本で隣人愛を実践したアメリカ人』新宿書房（発売）、2005

図書館の所蔵資料紹介

～《複製版》の楽しみ～

《複製版》とは、古い書籍一たとえば明治、大正時代や昭和初期に出版された本を、その装丁から活字まですべて当時のままに再現したもののことをいいます。古典や名作ともなると現在でも文庫などで簡単に手に入りますし、いつでも読むことができますが、複製版を手にとると当時の表紙のデザイン、材質や活字、ページの余白などにとっても趣があり、内容を楽しむのに加え、本というモノをトータルに楽しむ喜びに浸れることでしょう。

複製版の良いところは、本物であれば貴重扱いで自由に閲覧、貸し出しのできないような本も、手にとって借りることができる点です。ある意味特殊な本なので、文庫や新刊などのように開架閲覧室に並ばずに初めから地下書庫に配架されてしまうことも多く、皆さんの目に触れる機会は少ないことが残念なのですが、ぜひ利用してみてください。



表紙のデザイン



扉に作家の肖像写真

放浪記／林 芙美子

(「名著複製全集近代文学館」日本近代文学館)

原本は昭和5年(1930年)改造社より「新鋭文学叢書」の一冊として刊行された。当時ベストセラーとなり、繰り返し映画化や舞台化された、林芙美子の自伝的小説。

請求記号：B918-D.12-108 書庫上層 (横浜)

カチカチ山と花咲爺／武者小路実篤作, 岸田劉生画

(「日本児童文学館：名著複製」ほるぷ出版)

原本は阿蘭陀書房より大正6年(1917年)刊行された、武者小路実篤が最初に作った童話集。

装幀、挿絵は《麗子像》を描いたことで知られる画家岸田劉生による。

請求記号：B918-8-111 書庫上層 (横浜)



岸田劉生による表紙と挿絵



橋口五葉による表紙と函のデザイン

三四郎／夏目漱石

(「名著複製漱石文学館」日本近代文学館)

原本は明治42年(1909年)春陽堂から刊行された。アール・ヌーヴォー様式の装幀は橋口五葉のデザインによる。橋口五葉は『吾輩ハ猫デアル』をはじめ、他にも漱石の小説の装幀を手がけたことで知られている。

請求記号：B918-8-112 書庫上層 (横浜)

3 世代の図書館

原田 広

嘗て図書館を支配していたものは静謐と沈黙であった。図書館の入口へ続く階段に差し掛かると友人同士の親しげな会話が控え、少し背中を丸めながら足音を潜めて、その空間に合致した利用者に切り替える。待機する図書館のしつらえは、利用規則の外と内を仕切る窓口・カウンター、建物の何処かに収蔵されている資料への予感を秩序立てるカード目録、そして個人用蛍光灯で照らされる閲覧席というシンプルなものであった。図書館が利用し得た印字手段はタイプライター、複製技法は転写式の綴り用紙か謄写式印刷機、普及し始めたばかりの乾式コピー機であり、出版社・取次店・図書館など外部組織へのアクセスは印刷カタログ・電話回線に限定されていたから、図書館予算の大半は、資料費と人件費によって占められていた。

1980年代前半まで主流をなすこの近代的図書館（「ペーパー（紙媒体）図書館」*^{注1}）においても、様々の改善・高度化が図られてきた。資料提供手段としては、基本記入・副（分）出記入から成る手書き目録から複製技術の改善による印刷目録への転換があり、全国的な図書館の相互協力手段として、『学術雑誌総合目録』など全国的な共同目録編集事業への参加が定着する。新しく建築される図書館は、利用者が直接アクセスできる開架図書室や、レファレンス機能と一体となった参考図書室、雑誌閲覧室などの目的別閲覧室を備え、フィルムからビデオへ、レコードからCDへの転換によって取扱いが容易になったオーディオ・ビジュアル領域を取り込んで多機能化する。『図書館だより』本欄において連載・回顧されてきた神奈川大学図書館の“近代的”な業務分析の射程が届く範囲も、ほぼこのようなものであっただろう。

しかし、図書館が単体として運営されていた時代の静けさは、現図書館が開館した1980年以後、徐々に、内と外から破られる。象徴的な内的要因は、学部・大学院図書の集中管理による受入れ・整理冊数激増（1982年）への対応であり、法人が18歳人口の急増・急減期対応として開設した平塚キャンパスの図書館機能一体化への要請（1989年）である。外的要因は、1970年代後半から先駆的図書館によって独自に着手されていた業務電算化の

動向、1980年前後から開発が進められた学術情報センターによる目録所在情報サービス（NACSIS-CAT）の発展・普及である。そして当時の図書館（員）が、一本欄回顧子が記載しているように、新図書館機能の定着と充実に多くの精力を割く一方で、このような内的・外的要因のもとで次なる展開として選択したのは、平均年齢35歳前後・現在の約3倍を数える図書館員のマンパワーによる中央突破ではなく、「ペーパー図書館」から「機械化図書館」への転換であった。

これ以後、神奈川大学図書館の機械化（電算化）は、概ね3次のステップを踏むことになる。

第1次（1984年～）学部・大学院図書の集中管理：UNISYS独自開発による予算管理・受入れ登録システム。

第2次（1991年～）横浜・平塚キャンパス図書館機能一体化と総合化：IBM図書館パッケージDOBIS/Eによる目録管理（遡及入力を含む）、蔵書管理、発注・受入れシステム。^{*注2}

第3次（2003年～）クライアント・サーバー、インターネットへの対応：富士通図書館パッケージiLiswaveによるシステムの全面更新、WebOPACの提供。（これに2009年から進みつつある学術機関リポジトリによる「電子図書館」への踏み出しを付け加える必要がある。）

このペーパー図書館から機械化図書館への転換にともない、図書館では、従来の伝統的業務（発注・受入れ、整理・保存、閲覧・貸出）をシステム化という新規業務に搭載するための調整会議に膨大な時間を費やすことが日常化した。さらに90年代中盤以降は、WWW情報の拡大と電子出版の普及とによって電子図書館への漸次的移行が進み、資料・職員・施設という図書館の伝統的三要素の改善・更新は、どれを採っても、各種の外部資源・ヴェンダーを無視することが不可能となった。電子ジャーナルの登場により図書館が扱う資料の外延は溶融し、アウトソーシングの進行にとまって図書館に携わる職員は多層化し、施設設備管理における重要な仕事としてネットワーク端末の配置・更新が付加される。図書館資料・施設と利用者をシンプルに結びつけてきた職員の業務内容は変化し、求められる資質も複雑化した。

なにが変わったのか、なにが改善されたのか。図書館の機械化は、目録カードや転写式貸出綴りのファイリング業務から図書館員を開放した。オンライン目録は、業務結果を即時にOPACへと展開する劇的な利便化をもたらした。著者名の統一や雑誌名の変更を指示するカード目録の参照機能は、ハイパーリンクに置換された。貸出記録と利用者マスターのマトリクスによって、返却期限を過ぎた貸出図書の督促状を定期的に出力することも可能となった。NACSIS総合目録システムは、目録データ作成作業を効率化し、ILLシステムは、図書館間の文献複写・現物貸借を迅速化した。目が追える限りのスピードでページをめくる読書と調査の多くは、キーボードの打鍵とマウスのクリックに切り替わった。つまるところ齎された最大の効果は、処理の同時化・迅速化・合理化である。

必然的に管理・整理から利用サービスへシフトした図書館員の位置づけは透明化したのだろうか。図書館の管理能力・利用提供機能はどのように高度化したのだろうか。そもそも情報にアクセスすることは、図書館利用の入口に過ぎなかったのではないか（いや先走るまい）。

ペーパー図書館の象徴であったカード目録は、試みようとするれば、アルファベット順に配列された著者・書名目録のA-Zまでを、分類目録の0門-9門までを手繰り寄せることができる人的働きかけと俯瞰性のもとに存在した。一方、投入した検索語に応答する十数インチの画面に満足せざるを得ないOPACには、前後の書誌記録を一覧することから得られる学習効果や、検索語の自然な連想・展開を期待することはできないだろう（—これはカード目録時代に目録業務に携わり、反復的にカードに接した図書館員OJTとしても大きな役割を果たしていた）。同じく利用記録のマニュアル更新を日常業務とした閲覧係は、教員・院生の研究領域と利用の相関にある種の手応えを実感し、それをもとに収集係への組織的な選書情報提供を行っていたに違いない。一方、ほとんど外注業務となった機械化図書館におけるバーコードスキャン作業からこれらの効果を期待することは完全に放棄されているだろう（—ここは利用者のプライバシーを云々する場面ではない）。もうひとつ挙げると、コピー・カタログが主流となったこととともない、カタログの主題把握の調査力・判断力は自然低下し、著者名・件名標目のオーソリティ管理は二義的作業となり、必要と思われる一般注記や内容注記をローカル・オリジナルに追加することもなくなっているようである（—これらはコン

ピュータ処理が最も得意とし、作業的にも楽になった場面であるはずにも拘わらず、全国的に目に付く現象である）。

第3世代のとば口に立っている図書館は、ある種の踊り場に遭遇しているように思われる。電算化という速度がもたらす慢性的な疲労、職員の異常な減少による不活性化も一因であろう。しかし、この25年間、機械化から電子化へ突き進んできた図書館システムは、利用者が図書館に求める機能・サービスの真の媒介者足り得ているだろうか。より簡便な外部をザッピングするメディア文化の利用者に、図書館はより深く理解されるようになったのだろうか。機械化は（電子化も）、それ自体で新たな価値を生み出すことができるのだろうか。

どの時代にも図書館に完成形はないことは措くが、こうした図書館の本質的役割への問いは、機械化から電子化への移行が未だ不徹底だから生じているのでは必ずしもないと思われる。その方向性は不可避であるとして、この踊り場の状況を突破する契機は、当事者の正負の内的体験からしか見出すことはできないであろう。如何なるプログラムも熱意をもって受入れられなければ有用ではないのであり、横並びのひと揃いを超える“現在のな”業務分析が付加されなければならない。

そのためにはさほど有意でないかもしれない小文の最後に、“情報にアクセスすることは、やはり図書館利用の入口に過ぎないのではないか？”と再度問い、「読む」という実存的行為に資するためのきめ細かい備えを行うことが図書館の一義的な役割であり、そのような原点に立ち返ることができることが図書館の優越的な存在意義であると指摘しようと思う。

（はらだ ひろし 審議役 [元情報サービス課長]）

（注1）紙媒体・機械化・電子化図書館の発展区分は、M.K.バックランド『図書館サービスの再構築』。勁草書房、1994による。

（注2）図書館システム開発の第2次ステップ（NACSIS-CATと接続した書誌ユーティリティを共有する業務アプリケーションの総合化）については、神奈川大学情報化推進委員会編刊『神奈川大学における情報化推進の現状と課題』1997年12月に比較的まとまった総括と課題の記載がある。

図書館からのお知らせ



横浜・平塚共通

- ◎春季長期貸出期限日
2010年4月12日(月)
返却期限日までに必ず図書館に返却してください。
延滞すると延滞日数分(最長2週間)貸出停止になります。
- ◎図書館では学生証が必要です。
図書館では入館や図書を借りるときには必ず学生証が必要です。
- ◎ガイダンス
横浜図書館では図書館ツアー・OPAC利用ガイダンスを行います。奮ってご参加ください。
4月5日(月)~4月10日(土)の6日間、1日2回実施します。
(4月10日(土)は図書館ツアー1回のみ実施)
また、4月中旬から下旬にかけて映像セミナーを行います。6月にはレポートの書き方、プレゼンテーションの方法についての映像を上映します。詳細は図書館ホームページや掲示をご覧ください。
- ◎盗難への注意
盗難予防のため、貴重品(財布、携帯等)は席を離れる時、必ず身につけてください。
- ◎マナーは守りましょう
お互いに気持ちよく図書館を利用するために、下記の迷惑行為は止めましょう。
 - お喋り
 - ヘッドフォンの音漏れ
 - 携帯電話での通話
 - 指定場所以外でのパソコン・計算機の使用
 - 飲食

編集後記

「写本」というものをご存知だろうか。写本とは簡単に言ってしまうと手書きの本のことである。印刷技術がなかった時代、人々は自らの手で文字を書き、本を作っていた。本学図書館でも毛筆で書かれた和本や西洋の写本のレプリカ(複製)を所蔵している。

当時、高価な写本を所蔵することは富と権力の象徴でもあった。“ペリー公の時祷書”などに代表される装飾写本は修道士や職人などによって美しい文字が手書きされ、金やラピスラズリなどで彩色が施された。本というよりは芸術品のようなその美しさは、見る者の心を奪う。

しかし、この美しい「芸術品」を生み出すのは、大変な苦痛が伴う仕事だったようだ。写本の余白には、ときおりこの仕事の辛さを嘆く書き込みが見つかるそうだ。ある写本のあとがきには「汝が文字を書くことについて何も知らないならば、さほど難儀な仕事とも思わない。(中略)目はかすみ、背は曲がり、腹も胸もつぶれ、腰はひしゃげ、全身に痛みが走る。」とある。

文字を書くということは、本当は辛く苦しいことなのかもしれない。筆圧の調節、文字と文字の間の微妙なバランスのとり方・・・それは指先、手を含む全身の感覚を研ぎ澄ましてはじめてできる行為である。毎日パソコンを使う自分は、以前に比べて文字を書かなくなった。ちょっとしたメモを残したい時ですらキーボードをたたく。なぜならその方が楽だからだ。だがその結果、たった1,000字程度の文字を手で書いただけで疲れてしまう。漢字はどんどん忘れていく。

一人の人間に限らず、自分が本来持っている機能を際限なく他に託していく存在は、こうして退化の道をたどるのかもしれない。

(N.E.)

今号の表紙

『THE JAPAN PUNCH』 1865年12月号

開港期の横浜に「イラストレイテッド・ロンドン・ニュース」画報特派員として1861年来日したチャールズ・ワーグマン(Charles Wirgman, 1832-1891)が、当時の居留地の外国人向けに創刊した漫画雑誌。横浜居留地での事件や日本の風俗、人物像が多数描かれ、日本人の間でも評判を呼び“ボンチ絵”という言葉は明治漫画の代名詞となった。